

音楽祭に関わって15年

奥村容久さん

滋賀県合唱連盟顧問



長年教育に携わられてきた奥村さんは、響き合う歌声、小さな囁き、常に心の音を優しく受け止めてこられました。教育現場を後にされて以降、合唱団の指導や高齢者施設でのワークショップなど様々な場所で、大勢の人たちと一緒に輝くひと時を紡がれています。

— 命の躍動がほとばしる演奏に出会って

1975年、私が石部中学校に勤務していた頃のことですが、毎年、障害者支援施設もみじ・あざみ寮の文化祭に、石部中学校の吹奏楽部ともみじ・あざみ寮の音楽部が合同演奏する催しが行われていました。この時、寮生さんが歌った「手のひらを太陽に」は、私の音楽観を打ち砕く衝撃的な歌声でした。それは、心の底から命の躍動がほとばしるといった表現がびつたりの演奏でした。それ以来、障害のある人たちの音楽活動にずっと関心を持ち続けてきました。

— 糸賀先生の理念や思想

そうした折、以前から親しくさせていたたいいたもみじ・あざみ寮施設長の齋藤昭先生から糸賀一雄記念音楽祭の立ち上げの話があり、滋賀県合唱連盟の副理事長をしていた関係もあって実行委員会に参加させていただきました。それから15年になります。音楽祭では、障害のある人たちが、音とダンスで新しい文化

を創造しています。糸賀先生の「この子らを世の光に」に表される理念や思想が、音楽の分野にも広がってきていると思います。毎回、演奏を聴いていて感じるのですが、それぞれが思い思いに打つ打楽器のリズムが、やがて統一されて波のうねりのようになっていく不思議さ、心のうねりともいえるべきものが表現されているのではないかと思っています。

— 障害のある人たちの音楽表現のインパクト

私は、救護施設ひのたに園と養護老人ホームきぬがさで高齢者ワークショップに参画しておりますが、心の底から音楽を楽しむ人たちと一緒に幸せな時間を過ごさせていたたいいたしております。美術の部門では、アール・ブリュットとして障害のある人たちの作品が世界で脚光を浴びてきていますが、音楽の世界でも、障害のある人たちの音楽表現が多くの人にインパクトを与えられたらと思います。